2022.10 No.210

平和文化

公益財団法人 広島平和文化センター
Hiroshima Peace Culture Foundation

題字　松井一實
広島平和文化センター会長

被爆７７年　平和記念式典

被爆から77年目の8月6日（土）、広島市の平和記念公園で、市主催の平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）が行われ、被爆者や28都道府県の遺族代表の他、核兵器国のアメリカ、イギリス、フランスを含む99か国と欧州連合（EU）の大使や代表など、およそ三千人が犠牲者の冥福と世界恒久平和を祈りました。

式典は午前8時に始まり、最初に松井広島市長と遺族代表2人が、この1年間に亡くなられたことが確認された4,978人の氏名が記帳された2冊の原爆死没者名簿を、原爆死没者慰霊碑の中の奉安箱に奉納しました。これで名簿登録者総数は333,907人、名簿総数は123冊となりました。

続いて佐々木広島市議会議長の式辞、各代表による献花の後、原爆が投下された8時15分に、遺族代表の米田慎志さんと、こども代表の舛本陽毬さんが平和の鐘をつき、参列者全員が1分間の黙祷を捧げました。

この後、松井市長が平和宣言を読み上げました。市長は、ロシアによるウクライナ侵攻で、核兵器を使う可能性が示唆されていることにふれ、核保有国の為政者は、是非とも被爆地を訪れ、核兵器使用の結末を直視して、国民の生命と財産を守るためには、核兵器の廃絶以外に解決策は見いだせないことを確信していただきたいと訴えました。また、とりわけ、来年、広島で開催されるG7サミットに出席する為政者には、このことを強く期待すると述べました。

そして日本政府には、開催中のNPT再検討会議での橋渡し役を果たすとともに、次回の締約国会議に是非とも参加し、一刻も早く締約国となり、核兵器廃絶に向けた動きを後押しすることや、平均年齢が84歳を超え、心身に悪影響を及ぼす放射線により、様々な苦しみを抱える多くの被爆者に寄り添い、被爆者支援策を充実することを強く求めました。

続いて、こども代表のバルバラ・アレックスさんと山﨑鈴さんによる「平和への誓い」で、二人は「世界中の人の目に、平和な景色が映し出される未来を創るため、私たちは、行動していくことを誓います」と述べました。

この後のあいさつで、岸田内閣総理大臣は、我が国は、いかに細く、険しく、難しかろうとも、「核兵器のない世界」への道のりを歩み、非核三原則を堅持しつつ、「厳しい安全保障環境」という「現実」を「核兵器のない世界」という「理想」に結び付ける努力を行っていくと述べました。また、来年のG7サミットで、核兵器使用の惨禍を人類が二度と起こさないとの誓いを世界に示し、G7首脳と共に、平和と国際秩序、そして自由、民主主義、人権、法の支配といった普遍的な価値観を守るために結束していくことを確認するとの考えを示しました。

今回の式典では、グテーレス国連事務総長が初めて参列し、あいさつを行いました。事務総長は、深刻な核の脅威が、中東から、朝鮮半島へ、そしてロシアによるウクライナ侵攻へと、世界各地で急速に広がっていると述べ、核兵器保有国が、核戦争の可能性を認めることは、断じて許容できないとし、核保有国の指導者たちに、「核という選択肢を取り下げてください。永遠に。今こそ、平和を拡散させるべき時です。被爆者の方々のメッセージを聞き入れてください。もう二度と、広島の悲劇を引き起こさないでください。もう二度と、長崎の惨禍を繰り返さないでください。」と訴えました。

（総 務 課）

目　次

被爆77年平和記念式典 …… 1
NPT再検討会議に平和首長会議代表団を派遣 …… 2
被爆体験記朗読会／ピースナイター／ひろしま子ども平和の集い …… 4
ピースマッチ・ピースアクティビティ支援／スペイン語で式典オンライン参列 …… 5
被爆体験記「父子のわかれ」（廣中正樹）／長崎原爆犠牲者慰霊の会 …… 6
国際平和シンポジウム …… 7
被爆ピアノコンサート／「広島市民じゃけえ!」（ハインさん） …… 8
モントリオールの日／Aloha Festival …… 9
資料館企画展「爆心直下の町」／父と子の関係を描いた「原爆の絵」 …… 10
「原爆の絵」が完成／高校生「原爆の絵画展」 …… 11
ヒロシマ青少年平和の集い／ヒバクシャの思い・ヒロシマの心を国連へ、各国代表へ（広島県生協連　福島守） …… 12
核をめぐる「理想」と「現実」のはざまで:あらためて「ヒロシマ」の役割を考える（広大平和センター　川野徳幸） …… 14
難民と日本（難民支援協会　石川えり） …… 15
維持会員のみなさまへ …… 16

（公財）広島平和文化センター　〒730-0811　広島市中区中島町１番２号
TEL（082）241-5246（代表）　FAX（082）542-7941　E-mail:p-soumu@pcf.city.hiroshima.jp
令和４年（2022 年）10 月／年３回発行　［URL］https://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/

再生紙を使用しています

第10回NPT再検討会議に平和首長会議代表団を派遣

第10回NPT再検討会議の結果を受けて（所感）

会長 松井一實（まつい かずみ）

今回のNPT再検討会議においては、最終文書の策定過程で、核兵器の非人道性や核兵器禁止条約に関する事実関係を明記することのほか、核兵器の「先制不使用」宣言の採用や、「消極的安全保障」の国際合意に関して協議することなどが議論されましたが、前回に続いて最終文書を採択することができずに閉会となりました。

そうした結果に終わったことは、今回の会議に際して、田上富久（たうえとみひさ）副会長（長崎市長）が現地に赴き、平和首長会議の代表として求めた核軍縮・不拡散措置を確実に進展させるということに反するだけでなく、核兵器廃絶を願う被爆者の願いをいわば断ち切るものであり、極めて残念なことであると受け止めています。

こうした状況を打開していくためには、国家としての利益追求が国際的な枠組みの尊重よりも優先されるという事態を回避できない現状を改めるための社会環境を醸成していく必要があります。そのために、最終文書案や会期中に発表された共同声明において示された認識、すなわち核兵器の非人道性についての認識を国際社会に根付かせていくための取組が、これまでにも増して重要になってきました。

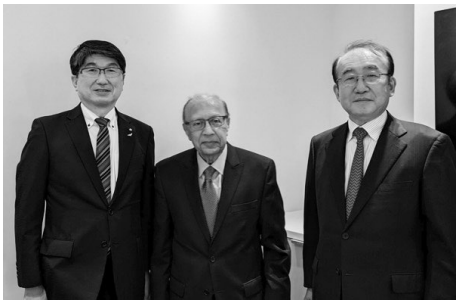
平和首長会議としては、こうした認識の上に立って、8,200を超える加盟都市の首長と共に、市民の安心・安全な生活を守るために、あらゆる暴力を否定する平和文化を振興し、為政者が核抑止力に依存することなく、対話を通じた外交政策を目指す環境づくりを推進していきたいと考えています。

平和首長会議は、今年8月、米国・ニューヨーク市で開催された第10回NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議へ田上富久副会長（長崎市長）及び小泉崇（こいずみたかし）事務総長（本財団理事長）等からなる代表団を派遣し、各国政府関係者等に、核軍縮・不拡散措置を進展させるための合意文書の採択や、核兵器禁止条約第1回締約国会議の最終文書を尊重すること等を要請するとともに、平和首長会議の取組に対する理解と協力を求めました。また、平和首長会議原爆ポスター展を開催し、核兵器のない平和な世界の実現に向けた気運を醸成しました。

8月3日（水）

チョウドリー元国連事務次長との面会

「平和文化」の提唱者であるアンワルル・チョウドリー元国連事務次長に松井会長からの書簡を手渡し、10月開催予定の平和首長会議総会における記念講演への登壇を依頼するとともに、平和文化について意見交換を行いました。



チョウドリー元国連事務次長（中央）との面会

8月4日（木）

全米軍備管理協会（ACA）事務局長との面会

ダリル・キンボール事務局長は、今回のNPT再検討会議は非常に困難な状況の中で開催されるもので、核兵器国の具体的なコミットメントが示されるかどうかが、会議の結果に直結するとの見解を示すとともに、平和首長会議の活動に敬意を表し、心から応援していると述べました。

また、1日の一般討論演説で岸田文雄（きしだ ふみお）総理大臣が創設を表明した「ユース非核リーダー基金」を活用した若者の被爆地訪問や市民社会を巻き込んだ平和文化の振興について意見交換を行いました。

米国大統領特別代表（核不拡散担当）との面会

アダム・シャインマン特別代表は、核不拡散・核軍縮はアメリカにとっても重要な課題であり、核兵器国の努力により核戦争を回避する必要があるとの見解を示すとともに、核リスクの低減について議論ができる環境づくりを進め、オープンで透明性のある対話を続けたいと述べました。

小泉事務総長は、アメリカ政府は今回の会議で最も重要な役割を担うことから、核兵器廃絶に向けた具体的な動きを表明するとともに、最終文書を採択するため努力するよう求めました。

軍縮会議日本政府常駐代表・特命全権大使との面会

小笠原一郎（おがさわらいちろう）大使は、広島・長崎の声を会議の場に届けることは会議の成功に向けて追い風となると歓迎する一方で、核兵器禁止条約の重要性は認識しているが、同条約には核兵器廃絶という出口までの具体的な手順が定められていないという問題があることや、核兵器を廃絶するには核保有国の関与が不可欠であり、日本政府が考える核兵器廃絶へのアプローチと異なっているとの見解を述べました。

小泉事務総長は、今後の核軍縮につながる最終文書の採択に向けた努力や核兵器禁止条約を推進することの重要性に対する理解を求めました。

アイルランド外務省軍縮不拡散部長との面会

オレイス・フィッツモーリス部長は、平和首長会議が都市レベルで積極的に核兵器廃絶の取組を進めることは非常に大きな力になると評価しました。今回の会議では、核軍縮に関する実効性のあるベンチマークを作り、核兵器への制約を設けなくてはならない、また、核兵器禁止条約とNPTの補完性についての調整役として、核兵器禁止条約がNPTの履行にどのように貢献できるかを考え、誤解があれば解消するよう努めていると述べました。

小泉事務総長は、これまでのアイルランド政府の核軍縮に向けた取組に敬意を表するとともに、アイルランド国内での加盟都市の拡大や今後の連携についての期待を述べました。

被爆者 サーロー・節子さんとの面会

サーロー節子さんは、北米地域において核兵器に関する報道がないことへの危機感を示すとともに、核軍縮に向けて、市民、大学、行政等が共に取り組んでいくことの重要性を訴えました。

また、田上副会長が、若い世代が核兵器廃絶に向けた取組のバトンを受け取ってくれていることが、私たちの希望となっていると発言したことを受けて、若者による継続的な平和への取組や被爆地を訪問し被爆の実相を知ることの大切さについて意見交換を行いました。

8月5日（金）

軍縮会議英国政府常駐代表・大使との面会

小泉事務総長は、「こんな思いは他の誰にもさせてはならない」という被爆者の願いを叶えるためには、核兵器廃絶しかないことを訴えるとともに、核兵器禁止条約とNPTの補完性に関する理解や今回の会議で最終文書を採択するための努力を求めました。

エイダン・リドル大使は、被爆者の願いは心に留めており、核兵器廃絶というゴールも共有しているが、英国政府が考えるアプローチと異なっているため、核兵器禁止条約は批准しないという見解を示すとともに、核なき世界の実現に向けては、情報の透明性を保ちながら核保有国間の対話を進める必要があると述べました。

日本原水爆被害者団体協議会主催 国連原爆展オープニングセレモニーへの出席

日本原水爆被害者団体協議会が主催する国連原爆展のオープニングセレモニーが開催され、木戸季市同協議会事務局長、グスタヴォ・スラウビネン第10回NPT再検討会議議長、田上副会長、小泉事務総長が挨拶とテープカットを行いました。

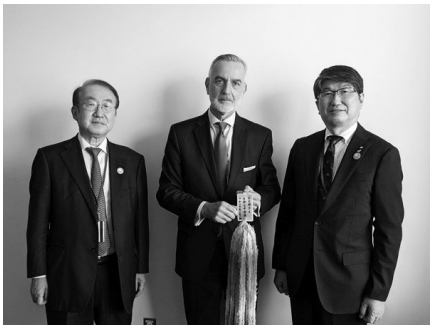
約1か月間開催された今回の原爆展では、48枚のパネルと共に広島平和記念資料館及び長崎原爆資料館が所蔵している被爆資料が展示されました。

軍縮会議フランス政府常駐代表・大使との面会

ヤン・ファン大使は、フランスは核軍縮に向けて努力しているものの、現下の複雑な安全保障環境の下で開催される今回の会議で合意文書をまとめることは容易ではなく、全締約国、特にロシアのNPTに対する貢献を確認する必要があるとの見解を述べるとともに、被爆の実相を知るために広島を訪問したいと表明しました。

小泉事務総長は、広島への訪問の期待を述べるとともに、核兵器禁止条約とNPTの補完性に関する理解や今回の会議で最終文書を採択するための努力を求めました。

第10回NPT再検討会議議長との面会


スラウビネン議長（左）との面会

市民社会に期待することは何かとの田上副会長の発言を受けて、スラウビネン議長は、核軍縮交渉は壁の内側で行われるため、市民社会はそのプロセスに関与することはできないが、SNSなど社会に影響を与えることのできるツールを活用して、市民社会が壁を取り囲み、団結して壁の内側に影響を与えてほしいと、核軍縮における市民社会の果たす役割に期待を述べるとともに、被爆地を訪問したいと表明しました。

小泉事務総長は、被爆者の核兵器廃絶への切なる願いを伝えるとともに、核兵器禁止条約とNPTの二つのアプローチが融合して生まれる相互補完性への理解や今回の会議で最終文書を採択するための努力を求めました。

第10回NPT再検討会議（NGOセッション）でのスピーチ

田上副会長が平和首長会議の代表として発言し、77年間、広島、長崎に続く第三の戦争被爆地が生まれなかったのは、被爆者の思いが世界に広がり、核兵器の非人道性への認識が高まっていったからだと指摘しました。また、こうした積み重ねも、ひとたび核兵器国が力任せに横暴なふるまいに出れば、脆くも一瞬にして崩れ去ってしまうと訴え、NPTと核兵器禁止条約は相互に補完し合い、国際社会が核兵器のない世界の実現への歩みを進めていくための両輪となるものであると呼び掛けました。

田上副会長によるスピーチ

更に、NPT第6条に定める核軍縮の誠実交渉義務を履行し、核軍縮・不拡散措置を確実に進展させるための具体的な道筋を示すよう要請しました。

最後に「長崎を最後の戦争被爆地に」という言葉を参加者に送り、核兵器廃絶の実現に向け力を尽くしていく決意を述べてスピーチを結びました。

8月1日（月）～8月26日（金）

平和首長会議原爆ポスター展の開催

第10回NPT再検討会議の会場において、会議に参加した方々に被爆の実相についての理解を深めてもらうため、平和首長会議原爆ポスター展を開催しました。

（平和首長会議運営課）

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館
被爆体験記朗読会を開催しています

被爆者とその家族などが記（しる）した体験記には、被爆の実相を知る者のみが書きうる真実や心情が綴（つづ）られ、胸を打たれます。

追悼平和祈念館では、こうした体験記や原爆詩を読み語ることによって、多くの人々が被爆者の記憶や思いを共有し、次の世代へ継承していくことを目的として、「被爆体験記朗読会」を開催しています。

朗読会では、原爆被害の実相を映像で紹介した後、被爆体験記朗読ボランティアが被爆体験記・原爆詩の朗読を行い、続いて参加者自らが原爆詩を朗読します。被爆当時の状況を想像しながら朗読を聴き、また実際に声を出して読むことにより、書き記された被爆体験が臨場感をもって伝わり、被爆者の悲しみ、苦しみや平和への思いが心に染み込みます。

8月5日、6日には、平和記念公園を訪れる方々に自由に参加していただけるように、5日に 2回と6日に4回、合計6回の朗読会を開催しました。

平和記念式典に参列するために広島を訪れた方や親子連れなど、のべ245名の方に参加いただきました。参加された方からは、「同じことを繰り返してはいけないと強く思った」「朗読会で知ったことを、自分の家族や友達に伝えたい」などの感想が寄せられました。

朗読会の様子

追悼平和祈念館では、毎月第3日曜日に開催している定期朗読会のほか、修学旅行や平和学習等で平和記念公園を訪れる児童や生徒を対象にした朗読会、広島市内外の学校等へ出向いて行う派遣朗読会など、さまざまな朗読会を開催しています。気軽に当館までお問い合わせください。

【お問い合わせ】

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館

TEL（082）207－1202

「ピースナイター2022」の開催

8月6日（土）、生協ひろしま等との共催により、広島東洋カープの試合の場を活用し、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けたメッセージを発信する「ピースナイター 2022」をマツダスタジアムで開催しました。15回目を迎えた今回は、昨年に続き「継承」をテーマに、様々なアクティビティを行いました。

①松井（まつい）市長や湯崎（ゆざき）県知事等による平和を願うメッセージの放映

②被爆３世であり、音楽を通した平和活動をされているシンガーソングライターの佐々木（ささき）リョウさんによる始球式

③広島東洋カープの監督、選手等のユニフォームへのピースワッペンの装着

④原爆ドームと同じ地上25メートルの座席の観客が赤色のポスターを、その他の座席の観客が緑色のポスターを掲げることによる「ピースライン25」の掲出

ひろしま子ども平和の集い

８月６日（土）、広島市教育委員会との共催により、若い世代の平和意識の高揚と主体的な取組の促進を図る令和４年度「ひろしま子ども平和の集い」を広島国際会議場で開催し、平和記念式典に参列した児童・生徒など、300 人以上が参加しました。

参加者は、最初に、中・高校生ピースクラブメンバーによる原爆被害の概要説明及び被爆体験講話を通じて、被爆の実相を学びました。

続いて、広島県内外から参加した 11 団体の児童･生徒が、平和への思いや取組を、合唱、群読、作文朗読など、様々な表現方法で、熱意を持って発表しました。

共同メッセージの発表

最後に、全ての発表団体の代表者がステージに上がり、平和な世界の実現に向けたメッセージを共同で発表しました。　（平和市民連帯課）

集まった3万人を超える観客と選手が一体となり、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて平和のメッセージを発信しました。（平和市民連帯課）

ピースナイター 2022

ピースマッチ・ピースアクティビティの開催支援

「One Ball. One World. スポーツができる平和に感謝」というスローガンの下、サッカー J1の「ピースマッチ」として、サンフレッチェ広島対FC東京の試合が、7月30日（土）にエディオンスタジアム広島で開催されました。

会場では、両チーム選手による「平和の宣誓」、黙とうが行われるとともに、広島市長・被爆者代表のメッセージや両チーム選手等によるピースマッチリレーメッセージが放映されました。

ポスター展示の様子

また、会場外でも様々なピースアクティビティが行われ、本財団は、被爆の実相を若い世代に向けて分かりやすく解説した「ヒロシマを知ろう!!　8月6日、きのこ雲の下で」のポスター展示や平和学習資料の配布を行うとともに、場外ステージで行われた被爆ピアノコンサートの実施に協力しました。

サンフレッチェ広島、サポーター、協力団体等と連携し、多くの方々にスポーツを通じて核兵器廃絶に向けた平和への思いを届けることができました。

（平和市民連帯課）

スペイン語圏向け広島平和記念式典オンライン参列

NGOフンダシオンサダコ代表、本財団専門委員　相川（あいかわ）　知子（ともこ）

日本から見て地球の反対側のアルゼンチンの首都ブエノスアイレスを拠点に、現地時間 2022 年 8 月 5 日午後 7 時 45 分、スペイン語通訳付の広島平和記念式典オンライン参列に、チリ、パラグアイ、メキシコなどスペイン語圏の国々や、日本各地から、約 100 名が参加しました。オンライン参列は今回で三回目です。

主宰の NGO フンダシオンサダコは、平和と友情と環境保全をテーマにアルゼンチンで平和文化活動を展開しており、学校や団体の要請で広島セミナー、平和の折り鶴教室、「サダコと折り鶴」ポスター展、平和映画上映会などを行っています。コロナ禍で学校訪問等の活動ができない中、アルゼンチンの首都ブエノスアイレスからいかに世界の人々の健康を願うか、平和のメッセージを発信するか、私達ができることを考えました。

私はスペイン語と日本語の会議通訳者ですが、国際会議や表敬訪問、商談会議などの人の往来がなくなり、それらは一部、オンラインで行われるようになりました。また私は日本語とスペイン語の教師でもありますが、ブエノスアイレス市立外国語大学の日本語のクラスは全てオンラインになりました。

現在、平和記念式典は英語に通訳されライブ発信されていますが、スペイン語発信はありません。しかし、オンライン化により、地球の反対側のスペイン語圏の人々も、時差さえ考慮すれば、生中継を見て広島の今を知ることがきるのです。

オンライン参列は、アルゼンチン人日本語学習者、日本人スペイン語学習者が司会役を務め、平和に関心の高いボランティアが受付などの業務を手伝ってくれ、私が同時通訳をするスペイン語で人々をつなぐ会となりました。参加者は、平和宣言、来賓のスピーチ、特に子どもたちの「平和への誓い」では涙しそうになりました。また、献花の様子を興味深く見つめ、慰霊碑の建設にまつわる説明にも耳を傾けてくれました。

式典終了後の交流会では、元ジャーナリストで被爆者の田中勝邦（たなかかつくに）さんの広島からの友情メッセージに感動し、ひろしま平和の歌をスペイン語で歌いました。また、狂言の先生による特別セミナーが行われ、「伝統文化を楽しめること」に平和を感じました。

この活動に参加した方々が在住の自治体に働きかけたことにより、平和首長会議加盟に至った市町村もあります。

オンライン参列は 2023 年も開催予定です。参加を希望する方はフンダシオンサダコの以下の SNS を御参照ください。

（インスタグラム） instagram.com/fundacionsadako/
（フェイスブック） facebook.com/fundacionsadako/

2022 年の交流会

被爆体験記

父子のわかれ
—広島原爆5歳10か月の体験—

本財団被爆体験証言者
廣中　正樹

昭和20年8月6日、原爆投下と黒い雨

私は5歳10か月の時に爆心地から約3.5kmの己斐上で原爆にあいました。現在の西区己斐町です。

8月6日の朝、私は近くの小川で水遊びをしていました。その時、ピカッと光り、一瞬にして目の前がオレンジ色に染まり、花火がドンというような音が聞こえました。数秒後、下流の方からものすごいスピードで茶色の爆風が音を立てて私におそいかかりました。立っていられなくて、後ろに転びました。近くの家の窓ガラスが割れる音、瓦が飛んで割れる音が聞こえました。私は何かが起きたことはわかりましたが、小さかったので、そのまま橋の下で水遊びを続けました。

そこへお母さんが「すぐ山の防空壕へ行きなさい。先に行って待ってるからね！」と呼ぶ声が聞こえました。川から上がり家に帰ると、玄関や部屋のガラスが割れて散らばり、危なくて入ることができません。私はその時初めて、大変なことが起きたと感じました。

あわてて防空壕に向かう途中、山の上の方にみるみる大きくなっていくきのこ雲が見えました。

防空壕でお母さんと妹に出会えた後、暗くて避難してきた人たちでいっぱいで動くこともできない穴の中に長い間身をひそめ、ものすごく退屈でした。外ではずっと放射能をふくんだ黒い雨が降っていました。

被爆した人たちの悲惨な姿

やっと小雨になってから家に戻ると、そこには被爆した人がガラスの破片だらけの場所に二人座っており、畳の部屋に二人寝転んでいました。私たちを見た瞬間、「すいません、水をください」と言われました。お母さんと私は急いで水をあげました。4人はとても喜んで、何回も何回も「ありがとう」と言われていました。4人ともひどいヤケドで、顔・手・胸・足・頭髪は焼けちぢれ、皮膚がひものように垂れ下がって肌は赤く火ぶくれになり、今にも死んでしまいそうに感じました。

家の前では、ヤケドを負った人が重たそうに足を引きずって次々と歩いて行きました。その人たちは体を前かがみにして、両手を少し前に出し、両手の皮膚が糸くずのように垂れ下がっていました。全身がヤケドの状態で、服は上も下も焼けてボロボロでした。

夕方、空をながめると、きのこ雲が大きくふくらみ、中心から上が宮島方面に長く伸びていました。

お母さんは顔と手をケガしていました。朝、出勤するお父さんを見送って、配給をもらいに行くために鏡の前で化粧をしていたときに、原爆の爆風で窓ガラスが割れ、その破片が飛んできたのです。妹は母のそばにいたのですが、さいわい切り傷程度でした。

父の被爆

少し暗くなった夕方7時ごろ、己斐小学校の先生からお父さんが小学校にいると聞き、お母さんは私と妹の手を引いて、家から500mくらいの小学校に向かいました。すれ違う被爆者の人はみんな同じ姿だったので、「お父さんですか？」と声をかけながら行きましたが、出会えませんでした。

小学校の校庭は、ケガをして横たわっている人、家に帰ってこない人を探す人でいっぱいでした。お母さんは私に、校庭近くの防空壕前で、「お母さんが帰ってくるまで、ここを絶対、動いてはいけません」と言い、妹を抱いて校舎の中に入って行きました。

しばらくしてお母さんが戻ってきて、お父さんが見つからないので家に帰ろうと言いました。8時ごろだったと思います。薄暗い上り坂を、道路に座っている人などに声をかけながら、家に向かいました。しかしお父さんはいませんでした。今思うと、このときのお母さんはどんなにか不安な気持ちだったことでしょう。

長崎原爆犠牲者慰霊の会

本財団では、平成15年（2003年）から毎年、長崎に原爆が投下された8月9日に、広島から長崎の原爆犠牲者に対して哀悼の意を表し、平和への誓いを新たにするため、「長崎原爆犠牲者慰霊の会」を開催しています。

広島平和記念資料館東館で開催した慰霊の会には、被爆者や市民など、約50人が参加しました。

長崎被爆体験記朗読会

本財団の小泉崇理事長の挨拶に続き、長崎市での平和祈念式典のテレビ中継を視聴し、原爆炸裂時刻の午前11時2分には、全員で黙とうを捧げました。

続いて、広島県原爆被害者団体協議会の箕牧智之理事長が挨拶され、最後に、長崎から来広された朗読ボランティアが長崎被爆体験記の朗読会を行い閉会しました。

（平和市民連帯課）

8時半ごろに家に帰ると、暗い台所にお父さんが座っていました。お父さんはかなり弱っていて、頭から背中にヤケドをし、ズボンはボロボロでした。二階に上がる途中でお父さんは私を呼び「背中に突き刺さっているガラスを抜いてくれ」と言うのです。ガラスは筋肉に深く突き刺さり、ペンチでも抜けなかったので母に代わってもらいました。

ローソクの明かりで父の背中のガラスを抜く(作者　廣中正樹)

お父さんは「通勤電車の中でピカドンにあい、熱い熱い熱線と爆風で電車のガラスが吹き飛んで背中に突き刺さった」と話してくれました。お父さんは、宇品の広島鉄道局に通勤途中、原爆が落ちた8時15分に、紙屋町付近（原爆ドーム付近）を通っていた電車の中で被爆したのです。ショックで気を失い、気が付いたときには、電車の中は気を失った人、亡くなっている人などが倒れていたそうです。お父さんは、川につかりながら長い時間歩き、約3km離れた己斐小学校までたどり着きました。ものすごい暑さと、市内が次々と火事になっていく中で、ヤケドを負った人たちの逃げる場所は川しかなかったのです。

8月7日、父との別れ

翌8月7日、私が目をさますと、お母さんがお父さんの枕元で、何かをしゃべりながら、おかゆを食べさせていました。お父さんはとても辛そうでした。午後3時か4時ごろ、お母さんが「お父さんが弱って苦しそうにしているので、正樹もここに来てお父さんのそばにいなさい」と呼びました。私は家の軒下の隅にいました。聞こえていたのですが、そばに行けませんでした。人前で涙を出すのが、小さいながらも恥ずかしかったのです。軒下で、悲しくて悲しくて柱に頭を付けてシクシク泣きました。涙が止まりませんでした。お父さんと別れることが、こんなに辛くて苦しいものかと感じました。

お母さんが「お父さんが亡くなったよ」と言い、私はもっと大きな声で泣いてしまいました。お父さんの年は満37歳でした。少ししてお父さんのそばに行き、手をにぎりながら、お母さんと一緒に泣きました。お父さんの顔は苦しそうな顔ではなく、いつもの優しい顔になっていました。

今思うと、お父さんが亡くなるとき、そばにいたら、最後に何か私に言ってくれたのではなかったでしょうか。「お母さんを頼む」と言ったのではと思います。大人になって、お母さんの悲しい気持ちもよくわかります。お父さんが亡くなった後、己斐上の苅場墓地で荼毘に付し、お母さんと私たち兄妹は、お父さんの実家の福山に8月23日に帰りました。

皆さんに伝えたいこと

私は当時5歳10か月でしたが、あの時の悲惨な状況が頭の中に焼き付いて忘れることができません。77年たっても、当時を思い浮かべて人に話していると、自然に涙が出てきて悲しくなります。でも、私の目で見た、頭の中に記憶した悲しみと怒りを、努力して絵や文章に書いて残し、思いを話しています。

被爆者の人たちは大変な苦労をしながら、今日まで自分の人生をがんばって歩んでいます。「人の命は地球より重い」という言葉があります。人の命は量り知れないものなのです。戦争で原子爆弾により一瞬にして何千何万の方が亡くなられました。国にとって父は十数万人の内の一人でしょうが、私たち家族にとって父は全てだったのです。いくらお金を積まれても、父は帰ってきません。どうか皆さんも、親から頂いた自分の命を大切にしてください。

最後に皆さんにお願いしたいことがあります。皆さんは私のような体験をしないでください。そして皆さんは、過去を学び、未来を考えてください。

プロフィール

〔ひろなか　まさき〕

1939年生まれ。被爆者として、長年、国内外で講話を行い、2022年から広島平和文化センターの被爆体験証言者として活動。座右の銘「命に感謝 今を生きる」

国際平和シンポジウム2022

7月30日（土）、長崎市と公益財団法人長崎平和推進協会、朝日新聞社の主催、広島市と本財団等の後援により、「国際平和シンポジウム2022」が長崎市の長崎原爆資料館ホールで開催されました。今回のテーマは「核兵器廃絶への道～世界を「終わり」にさせないために～」で、新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため、会場参加だけでなくライブ配信も同時に行われました。

基調講演では、米シンクタンク・軍備管理協会会長のダリル・キンボール氏が、「世界を『終わり』にさせないために」をテーマに、「ロシアによるウクライナ侵攻によって、核兵器は戦争を抑止するものではないことが明確になった」として、「核戦争に陥らない唯一の解決策は、核兵器の廃絶だ」と訴えました。

続くパネル討論では、キンボール氏のほか、韓国国家安保戦略研究院責任研究委員の金淑賢氏、大阪女学院大学教授の樋川和子氏、長崎大学核兵器廃絶研究センター長の吉田文彦氏、日本原水爆被害者団体協議会事務局次長の和田征子氏より、核兵器が再び使用されるかもしれない危機に直面している中、核兵器禁止

条約の意義や核兵器廃絶への道筋などについて、それぞれの専門的な立場から発言があり、その後活発な意見交換がなされました。

最後に特別トークとして、株式会社arcaのCEOでクリエイティブディレクターの辻愛沙子氏、長崎大学核兵器廃絶研究センター特任研究員の林田光弘氏の若者2名が「MZ世代（1980年代半ばから2010年に生まれた世代）は被爆体験を世界にどう伝えるか」をテーマに、これまでの活動を通して感じたことや自分たちの世代だからできることなどについて意見を交わしました。（平和市民連帯課）

被爆ピアノコンサートを開催

本財団では、市民一人一人が日常の生活の中で「平和」について考え、行動する「平和文化」の振興に向けた取組の一つとして、9月18日（日）、広島市中区東千田町のCLiP HIROSHIMAにおいて、被爆ピアノコンサートを開催しました。

使用した被爆ピアノは、爆心地より1.8kmの千田町の民家で被爆し、爆風で飛び散ったガラスの破片により無数の傷が残っており、美しい音色とともに、原爆の悲惨さを私たちに伝えてくれる「ミサコのピアノ」と呼ばれています。

被爆ピアノコンサートの様子

コンサートでは、広島出身のピアニストの渋谷次さん、バイオリニストの金原ソフィ絢子さんが、マンシーニの「ひまわり」やジョン・レノンの「イマジン」などの楽曲を、平和への祈りを込めて演奏しました。

また、千田地域を中心に活動する千田パンフルート合唱隊も出演し、合唱とともに、被爆樹木カイヅカイブキで作られたパンフルートの演奏を行いました。

最後に、出演者全員による東日本大震災復興支援のために作曲された「花は咲く」の合奏を聞き、出演者と来場者は平和への思いを共有し、平和への思いを新たにする機会となりました。（平和市民連帯課）

～ウチも、ワシも～ 広島市民じゃけえ！ ―外国から来て広島市民になった人にお話を伺いました―

ハインさん（ベトナム）

こんにちは。叡啓大学の学生のハインです。叡啓大学はソーシャルシステムデザイン学部のみの単科大学です。この学部では文理の枠を越えた知識やスキルを学び、地域から国際社会まで幅広い舞台で、様々な人と協力して社会の課題の解決に貢献することを目指します。キャンパスは広島市にありますが、私はこの秋から交換留学生として台湾で１年過ごす予定です。

ハインさん

私は中学生の時に初めて日本語に関心を持ちました。ベトナムでは小さな私塾が沢山あり、私もそこで日本語を習うようになりました。同じ塾に、日本人ビジネスマンや研究者の人たちもベトナムの言葉や文化を学ぶために通っており、直接日本人から日本の文化や社会の話を聞くことができ、ますます日本に興味を持ちました。そして、日本語の授業を受けられる高校に進みました。定期的に日本人の先生が来校し文化講座等を開いてくれる等、とても充実していました。

大学進学時には、「日本語を学ぶ」のではなく、「日本語で学ぶ」希望を持ちました。でも、ベトナムから直接日本の大学を受験するのは、とても狭き門です。そこで、私はまず大阪の日本語学校に入学し、入試の準備を進めることにしました。日本語学校は学費が高く、アルバイトと勉強の両立はとても大変でした。でも、「いろんな人と話したい。もっと理解したい」という思いでがんばることができました。台湾でも、色々な新しい人・物と出会いたいです。

最後に、最近のベトナム事情について触れます。この夏休みは、コロナ禍になってから初めてベトナムに帰省しました。私の故郷のフエは、昔王朝が置かれた古都で、日本でいえば京都のようなところです。前回の帰省では高層ビルはありませんでした。でも、今回の帰省では、ランドマークのタワーができるなど、急に景色が変わっていて驚きました。

また、物価もとても上がりました。数年前はノート１冊が日本円で５円程度で買えたのですが、今回の帰省時には275円もしてびっくりしました。

ただし、ニュースでは、ビックマックの価格の高さを比較し、日本とベトナムで大差なくなってきていると言っていたのですが、実は、ベトナムでは外国のチェーン店の物価は昔から高いです。大衆化しているものは値段が安く、フォーやバインミー（ベトナム風サンドイッチ）は今でも比較的安く食べられますよ。皆さんもベトナムに行ったら、是非美味しいものを食べてくださいね！

広島市姉妹・友好都市の日記念イベント
モントリオールの日

広島市は、海外の6つの都市と姉妹・友好都市提携を結び、交流を行っています。平成13年（2001年）には各都市にちなんだ「姉妹・友好都市の日」を定め、毎年、この日の前後で市民参画型の交流イベントを行い、都市間交流の一層の拡大と友好促進を図っています。

7月10日（日）、福屋広島駅前店６階マルチの広場で、「モントリオールの日」記念イベントを開催しました。（主催―令和4年度モントリオールの日実行委員会）

モントリオール市はカナダ・ケベック州最大の都市で、1976年にはモントリオール・オリンピックが開催されたほか、国際ジャズフェスティバルの開催地としても知られています。

新型コロナウイルス感染拡大の影響により3年ぶりのイベント開催となった今回、会場には広島市との交流の歴史を伝えるパネルや記念品を展示し、カナダ特産品の展示・販売ブースを設け、約250人の来場者で賑わいました。

オープニングセレモニーでは、主催者のあいさつ、モントリオール市長から届いたメッセージの紹介、来賓としてケベック州政府在日事務所代表代理、在日カナダ大使館参事官（広報部長）のあいさつがありました。

続いて、イベント全体の司会も務めるヒロシマ・メッセンジャーの橋本翔子（はしもとしょうこ）さん、山下利恵（やましたりえ）さんが、自らの滞在体験を織り交ぜながら「モントリオール市＆カナダの紹介」を行い、現地の魅力をわかりやすく伝えました。

記念パフォーマンスでは、サックス奏者のアンディ・ウルフさんとギター奏者の諏訪光風（すわこうふう）さんをゲストに迎え、ジャズの生演奏を披露していただきました。会場には県外から訪れた熱心なファンの方々の姿もあり、素晴らしい演奏に会場は大いに盛り上がりました。

記念パフォーマンスの様子

最後にはメープルシロップやカナダにちなんだ書籍、各種グッズを景品としてお楽しみ抽選会を行いました。

来場者アンケートでは、特にジャズの生演奏に「心が込もっていて素晴らしかった」「元気をもらえた」といった感動の声が大変多く寄せられました。また、イベントを通して「モントリオール市、カナダのことがよくわかった」「是非行ってみたくなった」など、同市の魅力を知り交流に興味を持ってくださった方も多くみられ、友好親善を深める大きな一歩となりました。

（国際市民交流課）

「Aloha Festival」を開催

9月1日（木）夜、エールエール広島駅南口地下イベント広場で、Aloha Festivalと題してハワイ州・ホノルル市との友好を記念するイベントを開催しました。

広島からは戦前にたくさんの移民がハワイに渡りました。また、ホノルル市のパールハーバーで太平洋戦争が始まり、戦争末期には広島に原爆が落とされたという歴史があるからこそ、両市が友好を育くむ意義があります。広島市はホノルル市と昭和34年（1959年）から姉妹友好都市提携を結んでおり、平成13年（2001年）に姉妹都市提携を祝う「ホノルルの日」を定めて、記念イベントを毎年開催しています。

今年は、広島県とハワイ州の友好都市提携25周年を祝い、ハワイから約60名の訪問団が来広する時期に合わせ、イゲ・ハワイ州知事、ハワイ州上院議員の方々にも出席を頂いて、市民約300人と共に盛大に開催しました。

来場者には開演前より、ハワイアングッズ、スイーツ、リボンレイの展示・販売や、ハワイと広島の繋がりを紹介するパネル展示を楽しんでいただきました。

記念イベントは、まず、儀式などで披露されることが多い古典フラ「カヒコ」で始まり、その後、実行委員長、ハワイ州知事、広島県知事、広島市長、ビデオによるホノルル市長の挨拶がありました。

さらに、ハワイ州観光局提供のビデオ上映では、大自然と環境への配慮、先住民の固有の文化への理解、ハワイと日本の文化的共通点等を、美しい映像を通して学ぶことができました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーの三戸田和恵（みとだかずえ）さんと辰崎裕美子（たつざきゆみこ）さんが、それぞれ、ご家族がハワイに移民した話や、フラ講師としてのハワイへの渡航経験を交えながら、ハワイを紹介し、好評でした。

記念ステージでは、まず広島のフラグループがハワイアンバンドの生演奏に合わせて華やかな演舞を披露し、ハワイからの来賓に、広島市民が日頃からハワイ州・ホノルル市に親しみを持っていることを伝えました。また、メインコンサートでは、世界的に著名なウクレレ奏者であるジェイク・シマブクロ氏とハーブ・オオタ・Jr氏が演奏し、会場全体が穏やかで美しい音色に包まれました。イゲ州知事がマイ・ウクレレでステージに飛び入り参加して見事な演奏を披露する一幕もあり、思い出に残るハワイアン・ナイトとなりました。

フィナーレで一緒に舞台に立つジェイクさん、ハーブさんと、広島のフラダンサー

（国際市民交流課）

平和記念資料館令和4年度第1回企画展
爆心直下の町ー細工町・猿楽町

場所　平和記念資料館東館1階 企画展示室
期間　令和4年9月16日(金)～令和5年2月13日(月)

通りに面した病院の前に立つ爆心地の説明板。現在も島内科医院として続く島病院の上空600メートルで原爆がさく裂したことを伝えています。そこから北西に160メートル離れた場所に立つ原爆ドーム。被爆当時、広島県産業奨励館と呼ばれ、ドーム部分の鉄枠と壁の一部をとどめる姿が、被爆の惨状を訴えています。島病院と広島県産業奨励館は、それぞれ細工町、猿楽町と呼ばれた町にありました。

企画展は、この爆心直下の2つの町に焦点をあて、「被爆前の街並み」、「変わり果てた光景」、「再建の歩み」の3つのコーナーで構成しています。

最初のコーナーの「被爆前の街並み」では、細工町と猿楽町の街並みやそこで暮らす人々の様子を写した写真を中心に展示しています。細工町には、広島郵便局のほか、古くからのお寺や複数の病院が立ち並び、静かで落ち着いたたたずまいを見せていました。猿楽町では、通りに沿って様々な商店が立ち並び、にぎやかで明るい下町の風情がありました。当時の住民の方は、猿楽町の通りを「スキップしながら袋町の小学校まで通った通りでした。」と語っています。人々は、町内の行事があれば、皆で協力し合い、仲良く和気あいあいと暮らしていました。

次のコーナーの「変わり果てた光景」では、原爆によって一瞬に焦土と化した町と犠牲となった人々について伝えています。

原爆により町内にいた人々は、ほぼ全員亡くなりました。動員先や疎開先から家族の消息を求めて町内にたどり着いた人々の目の前には慣れ親しんだ街並みや家族と過ごした家はなく、歩くのが困難なほど多くの黒焦げの遺体が横たわっていました。展示資料の中には、細工町の黒川病院の焼け跡から見つかった薬瓶があります。瓶は高熱で変形し、指の痕が残り、中には当時の錠剤が入ったままです。瓶が見つかった周りには、薬棚のガラスが溶け、何人かの看護師たちの骨と一体となっていました。

指の痕が残る薬瓶（菅原桂子氏寄贈）

最後のコーナーの「再建の歩み」では、初めに猿楽町の焼け跡に一軒の家屋が建ち始める写真を展示し、再建の道を歩み始めた町の様子について伝えています。猿楽町で自転車卸業を営んでいた川本福一さんは、妻と娘の一人を原爆で亡くし、自身も傷を負っていましたが、避難先からいち早く戻り、元の場所に店舗を再建しました。また、猿楽町で化粧品の製造・販売を営んでいた伊勢屋商店の伊勢千枝子さんが戦後に生まれた子どもを抱いている写真を展示しています。千枝子

父と子の関係を描いた「原爆の絵」

広島平和記念資料館では、約5,000枚の「市民が描いた原爆の絵」（以下、「原爆の絵」）を所蔵しています。資料館本館「絵筆に込めて」のコーナーでは、その原画を展示しており、展示による劣化を防ぎ長期的に保存していくため、半年ごとにテーマを決めて入れ替えを行っています。今回は、被爆後の父と子の関係を描いた絵を展示しています。

①の絵には被爆死した3歳の娘の遺体を自らの手で火葬する父親が描かれています。これは絵の作者自身の体験を描いたものです。作者の石風呂環さんは、原爆投下当日、広島市内の妻の実家に9歳の次男と3歳の長女を預け、妻とともに鉄道で郊外に出かけていました。異変に気づき市内に戻り、翌日に娘の遺体を引き取り、火葬したといいます。

②の絵には、建物疎開の作業現場で被爆死した息子の硬直した遺体を、自転車の荷台に載せて運ぶ父親の姿が描かれています。この遺体の少年と同じ中学校の生徒だった作者の石田晟さんは偶然この様子を見かけ、声をかけられずじっと見ていたといいます。

これらの絵を含めた6点を、令和5年2月13日まで展示する予定です。

① 娘の遺体を火葬する父親
(1945年(昭和20年)8月7日夕方／石風呂環作)

② 硬直した息子の遺体を自転車に乗せて運ぶ父親
(1945年(昭和20年)8月7日、爆心地から900m、小網町付近／石田晟作)

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課／ TEL（082）241 － 4004

さんは、店を営んでいた夫を原爆で亡くし、残された6人の子どもを養うため、雑貨店を営みながら必死に毎日を生きました。

展示を通して、人々が努力し、積み上げてきた暮らしを一瞬にして奪う原爆の悲惨さと、家族や同僚を失い、つらい記憶を抱えながら、必死に生きる人々の強い意志を感じ、平和の大切さを考えていただければと思います。

【お問い合わせ】
平和記念資料館　学芸課
TEL（082）241－4004

「原爆の絵」11点が新たに完成
―高校生たちが被爆体験を絵に描く―

本財団は、広島市立基町高等学校普通科創造表現コースの協力を得て、被爆者と同校生徒が協働して被爆時の記憶に残る光景を描き、当時の状況を伝える「原爆の絵」の制作に取り組んでいます。

このたび、6人の被爆者と11人の生徒が令和3年度から制作を進め、11点の絵が完成しました。これまで平成19年度（2007年度）に制作を依頼して以来、150人を超える生徒が携わり、182点もの貴重な絵を残しています。

今年7月1日に基町高等学校で完成披露会が行われました。新型コロナウイルス感染症対策を徹底し、6人の被爆者と、絵を制作した生徒を始めとする創造表現コース生徒のほか、本財団及び基町高等学校関係者が出席しました。

被爆体験証言者の八幡照子さんと、川畠芽衣さん（3年生）は、『お骨が入った紙袋』という作品を制作しました。八幡さんは、原爆投下の3日後、避難所となっていた己斐国民学校の校門の近くで、白い紙袋が机に並べられているのを見つけました。食べるものも無くお腹がぺこぺこだった当時8歳の八幡さんは「お菓子配ってる！」と飛んで行ったそうです。しかし、行って見ると袋の中身は校庭で火葬された方の遺骨で、家族を探しに来た肉親がせめてもの供養にと持ち帰っていたことを後になっ

「お骨が入った紙袋」
制作：川畠芽衣（基町高等学校普通科創造表現コース）、八幡照子（被爆体験証言者）

高校生が描いたヒロシマ「原爆の絵画展」

8月7日（日）から8月19日（金）まで、広島国際会議場地下2階ダリアにおいて、高校生が描いたヒロシマ「原爆の絵画展」を開催しました。今回は、今年7月に完成した11点を含む約60点の絵を展示しました。

期間中は、毎日多くの方が来場し、当時の惨状が克明に描かれた絵を真剣な表情で見ていました。特に8月11日に開催したギャラリートークでは、用意していた席がほぼ満席になるほど盛況で、今年新作の絵を制作した同校3年生の寺西茉理さんと山口伶さんが、多くの来場者やマスコミの前で発表しました。

寺西さんは、被爆者の瀧口秀隆さんの証言を聞いて「爆風で吹き飛ばされて」を描きました。ギャラリートークでは「この活動を通して様々な学校の人たちと交流し、朗読や紙芝居などを使って戦争を伝えている人々に出会うことができました。私も自分の得意な分野で平和の大切さを伝え続けていきたいです」と話していました。

山口さんは、被爆者の切明千枝子さんから聞いた話を基に「つまずいたのは炭化した幼児だった」を制作しました。「人が炭化して亡くなったということに驚き、戦争の悲惨さをあらためて知りました。また、この原爆の絵が、自分のような戦争を知らない世代の人たちにも平和や戦争について考えるきっかけになってくれると嬉しいです」と話していました。

このギャラリートークを終えて二人は、「公の場で作品を見てもらうのは初めてなので、どのように受け取られるか不安で緊張しましたが、幅広い年齢層、海外の人にも真剣に聞いてもらい、自信がつきました」「証言者と共に絵を制作した経験を語る機会を与えて頂き感謝しています。トーク後、多くの人と話をして人によって原爆に対する感じ方が違うことが分かったので、他の人の考え方を知る貴重な機会になりました」と感想を述べていました。

ギャラリートークの様子

この絵画展は、広島国際会議場の自主事業として毎年開催していますが、今回も毎日来場してくれた人がいたり、この素晴らしい絵をより多くの人たちに見てもらうためにもっと広く広報してほしいとの意見をいただくなど反響も大きく、今後も開催していきます。

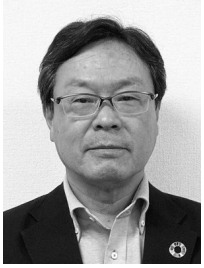
（国際会議場）

て聞きました。ここで火葬された方の多くは、建物疎開作業中に亡くなった学生だったことを知り、「時代を耐えて生きた子供たち。どんなに苦しかったことか。生きたくても生きられなかった人がいた」と悔しく思われたそうです。八幡さんは命の尊さを伝えたいとの思いからこの絵の制作を決めたとおっしゃっていました。完成した絵を見て、家族を探しに来た人の悲しみ、遺骨を引き渡す人の戸惑いと家族の悲しみに対する共感が伝わってきて、涙が止まらなかったそうです。絵の力に感動するとともに制作した川畠さんに感謝したいとおっしゃっていました。

絵を制作する生徒は当時の様子を再現するために、過去に制作された「原爆の絵」や平和記念資料館の情報資料室などを活用しています。川畠さんは、遺骨が配られている当時の資料が見つからず、情景を想像するのが難しかったと話していました。家族を失った人は誰のものかも分からない骨を持ち帰ることしかできないことが、戦争の恐ろしさや残酷さを表していると感じたそうです。この絵を通じて「核兵器は使用してはいけないし、所持してはいけない。戦争を起こしてはいけないということが多くの人に伝わればいいと思う」と完成披露でのスピーチを締めくくりました。

このたびの制作では、昨年に引き続きコロナ禍で生徒が被爆者の話を対面で聞くことができない中、電話や郵便を通して、絵の進捗状況を伝えました。実際の絵の色と印刷した色では違いがあり、制作終盤の細かい調整には苦労もあったようです。被爆者と生徒のこうした努力により完成した「原爆の絵」は、被爆体験をより深く理解してもらうため、証言者による被爆体験講話での活用のほか、絵の貸出や、市民やマスコミ等への画像データの提供なども行い、原爆被害の実相を後世に継承するために今後とも役立てていきます。

（平和記念資料館　啓発課）



ヒバクシャの思い・ヒロシマの心を国連へ、各国代表へ
～被爆者の方々をサポート～

広島県生活協同組合連合会
事務局長　**福島　守**

今年8月にニューヨークの国連本部で開催された核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議に、日本生活協同組合連合会（日本生協連）が派遣する代表団の一員として参加しました。前回は、全国の生協から100人規模の代表団でしたが、今回はパンデミックの影響もあり、6人（日本生協連3人、広島1人、長崎2人）と規模を縮小しての派遣となりました。派遣の目的は、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の代表4人の活動をサポートし、共に核兵器廃絶を訴えることです。

中・高校生ピースクラブ「ヒロシマ青少年平和の集い」の実施

本財団では、21 世紀を核兵器や戦争のない「平和な世紀」とするために、自ら平和の推進に取り組む人材を育成することを目的として、中・高校生ピースクラブを運営しています。

令和 4 年度は、中学 1 年生から高校 3 年生まで 24 人が参加し、平和記念公園内慰霊碑についての学習や、被爆体験証言講話や被爆体験伝承講話を聞くなどして、戦争と原爆の恐ろしさを学び、平和な社会をどのように築いていくのかを考えています。

8 月 5 日（金）には、被爆の実相や平和の尊さを発信するため「ヒロシマ青少年平和の集い」を 3 年ぶりに対面で開催し、平和記念式典等に参加するため全国から派遣された 8 団体・80 人の青少年が参加しました。集いでは、中・高校生ピースクラブのメンバーが会場準備から司会進行まで全てを担当し、コロナ禍で様々な制約がある中、全国各地の青少年と対面で交流できることを楽しみに企画を進めました。

当日は、メンバー 3 人が原爆被害の概要を説明した後、証言者の山本玲子（やまもとれいこ）さんが自身の被爆体験について講話を行いました。

その後、「被爆者の思いを受け継ぐ方法」をテーマにグループディスカッションを行い、活発な意見交換の場となりました。中・高校生ピースクラブのメンバーからは、「広島県外の人のヒロシマや原爆に対する関心の高さに驚き、意見交換ができて良かったです」といった感想が挙がり、参加者からは、「同年代のピースクラブのメンバーから直接被爆の説明を聞くことで、より身近な出来事として主体的に聞き、考え、意見を発信する機会となりました」「実際に体験した被爆者の方から当時の様子を直接聞けたことが、強い印象として残りました。数値的なデータより訴えるものがありました」といった感想が寄せられました。

ディスカッションする参加者

（平和記念資料館　啓発課）

生協は「平和とよりよい生活のために」を理念に、全国で様々な平和活動に取り組んでいます。広島・長崎の被爆者の方とともに核兵器廃絶を世界の人々に訴える活動を行ないました。

【各国代表部への要請】

核兵器廃絶への具体的な前進が合意されるよう、被爆者の方が自身の体験と核兵器廃絶への願いを伝えました。

最初に、今回面会した唯一の核保有国である英国の代表との会談では、核兵器を減らす努力をすると言われたことに対し、日本被団協の木戸季市事務局長は「減らすだけではダメだ、0にしなければダメだ」と一喝し、思いを伝えました。

次のオーストリア代表との会談では、核兵器禁止条約第1回締約国会議で大きな役割を果たしたことへの感謝を伝え、代表は「被爆者の方の思いを受け取り仕事をしていく」と述べられました。

また、メキシコの軍縮大使へは、取り組みと貢献への感謝を伝えました。大使は被爆者やNGOの活動を評価し、「若い世代への教育に取り組み、政府とNGOとの懸け橋になれるよう尽力する」と心強い言葉をいただきました。

国連日本政府代表部との面会では、木戸事務局長は、岸田文雄総理の演説は具体的に何をするのかが曖昧だと指摘し、日本被団協の和田征子事務局次長は、核兵器禁止条約に言及してほしかったと述べました。小笠原一郎軍縮大使は、「広島選出である岸田総理は、核なき世界に向けて熱い思いを持って取り組んでいる。目指すものは同じだ。核兵器廃絶のためのプロセスを作る必要がある」と無難な回答でした。

各国代表との会談では、被爆者の方々の核兵器廃絶への熱い思い、揺るぎない言動、世界への訴えに感銘を受けました。

【国連への要請活動】

中満泉国連事務次長兼軍縮担当上級代表との会談には、被爆者のサーロー節子さんも同席されました。和田事務局次長から中満代表に、被爆者に寄り添った理解ある言動への感謝を伝え、中満代表からは、被爆者を労い、被爆体験や核兵器の恐怖を発信していることへの感謝をいただきました。最終文書の採択と核軍縮への期待を述べ会談を終えました。

中満代表（前列左）との会談

国連ロビーで開催された原爆展では、被爆の実相や、70年以上活動してきた被爆者の取組を、全国の生協の募金で製作されたパネルで紹介しました。オープニングセレモニーでは、田上富久長崎市長、広島市長代理の小泉崇平和文化センター理事長が挨拶。続いて木戸事務局長が被爆した当時を振り返って「遺骨も分からない。それまで生きてきた人間の全てが消された」と核兵器の非人道性を強調されました。今回の再検討会議議長のグスタヴォ・スラウビネン大使も登壇し、「広島、長崎への原爆投下は、人類への投下だ」と述べました。原爆展は多くの方が熱心に見学し、米軍海兵隊の教育者も被爆者の話に耳を傾けていました。

また、NGOセッションに登壇した和田事務局次長は、「核保有国とその同盟国は、不誠実と傲慢さのために人類全体が核戦争の瀬戸際にあることを認識し、『明確な約束』を誠実に履行してください」と訴えました。

【被爆の実相を広げる活動（被爆体験証言）】

ドイツ平和協会、東京大学ＮＹオフィス、NY仏教会、聖ヨハネ大聖堂チャペルで証言活動を行いました。また、国連チャーチセンターにおいて、日本時間の8月6日8時15分に合わせて平和の集いが行われ、田上市長、小泉理事長、木戸事務局長が平和の鐘を鳴らし、松井一實広島市長のメッセージが発信されました。

【NPT再検討会議を終えて】

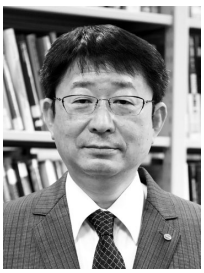
ただ1つの国が異議を唱えて全会一致での合意には至らず、最終文書が採択されなかったことはとても残念です。しかし、次のように成果もありました。①圧倒的多数の国が核保有国に核兵器廃絶へ具体的な行動を起こすよう迫り、世界のうねりを示す会議になった。②ロシアを除く全ての締約国が異議を唱えなかった最終文書案には大きな意義がある。

これから大切なのは、今回の成果及び明確になったことを認識することと、そこから導き出される“道筋”を整理して課題化することです。唯一の戦争被爆国である日本が何を発信するかが大きなポイント。そのために世論で日本政府の姿勢を変えることができると確信します。

今回の派遣で得た情報、体感したことをもとに、行政や日本被団協、広島県被団協等、市民団体とともに核兵器廃絶に向けての取り組みを推進していく決意を新たにしました。（2022年9月）

プロフィール

〔ふくしま　まもる〕
1959年生まれ。広島県呉市出身。神奈川大学法学部卒業。1983年広島県民生活協同組合（現生活協同組合ひろしま）に入協、人事部、店舗部、宅配事業部管理職を歴任。2013年広島県生活協同組合連合会事務局長、現在に至る。



核をめぐる「理想」と「現実」のはざまで：あらためて「ヒロシマ」の役割を考える

広島大学平和センター
センター長・教授　川野　徳幸

2022年2月24日、ロシアはウクライナへの軍事侵攻を始めた。この軍事侵攻は、私たちを三つの分岐点に立たせ、「理想」と「現実」とのギャップを再認識させているように思える。同時に、「核なき世界」を標榜する「ヒロシマ」に重い課題を突き付けているようにも思える。広島が「ヒロシマ」であり続けるのか。この重要かつ重い命題にどのように応えるのか。広島が必ずしも望まない「現実」を一般の多くの国民が選択し、ある意味、孤立してでも「ヒロシマ」・「ナガサキ」は「核なき世界」という理想を追求し、訴え続けるのか。今、その孤立に対する覚悟をも問われているのかもしれない。

まず、三つの分岐点について考えてみたい。一つは、核兵器に対する考え方である。核兵器の脅威に対し、「核抑止」に依存するのか、あるいは「核なき世界」の実現を目指す核兵器禁止条約のような国際規範を追求するのか、という意味での分岐点である。二つ目は、原発の是非についての分岐点である。自国のエネルギーは原子力ででも賄う必要があるとする考えと今般のザポリージャ原発のように、制圧され危険に晒されるという脅威をどのように考えるのか。三つ目は、国際協調主義に対する考え方である。第二次世界大戦後、外交による国際協調主義を模索し続けた国際社会が、武力による社会へと回帰するのか否かという分岐点である。

これら分岐点は、「理想」と「現実」のはざまにある。私たちは、常に「理想」と「現実」のはざまで浮遊し、それらと共存し、かつ両者の微妙なバランスの上に立っている気がしてならない。多くの人は、それを自然に受け入れ、またある人はそれをジレンマと感じているのかもしれない。核兵器に関して、これらのことを考えてみると、「核なき世界」、そしてそれを実現する国際条約である核兵器禁止条約が「理想」で、日米安全保障体制・核の傘・核抑止が「現実」と捉えることができよう。

学生の平和観について、2020年より、読売新聞と弊センターファンデルドゥース准教授と共同調査研究を進めている。そこでもやはり、この「理想」と「現実」の実態が浮き彫りになった。ごく一部を紹介すれば、広島大学、長崎大学を含む全国8大学で約千人を対象とした2021年調査では、9割弱が「日本は核兵器禁止条約に参加（署名・批准）すべき」と回答する一方で、半数以上が「核兵器廃絶の可能性は低い」と回答し、約4割が「核の傘」にある現状に対して理解を示した（川野徳幸、ファンデルドゥース ルリ、「被爆76年学生平和意識オンライン調査」の集計結果、『広島平和科学』43、129-143、2021）。さらには、この軍事侵攻後に実施した2022年調査では、核兵器そのものについては、約8割が廃絶・削減が必要と回答した一方で、全体の約75%が今後の核兵器使用の可能性は高いと回答した。これは、昨年の同調査から13ポイント上昇している。また、日本が米国の核の傘に依存することにも8割強が「理解できる」、「仕方ない」と回答した（2022年7月31日・8月1日付『読売新聞』）。このように、この軍事侵攻は、私たちの「理想」と「現実」の乖離をより大きくし、両者の間にある葛藤を深刻にしている。今後、「現実」、つまり「核抑止」への依存、そして軍事費の増額という方向にかじを切る可能性も小さくないことも暗示しているのかもしれない。

「理想」と「現実」との共存は、多くの日本人に自然にある感覚なのかもしれない。他方、「核なき世界」という思想を牽引し続ける被爆者には、これはジレンマであると言えるだろう。2015年実施の朝日新聞アンケート調査によれば、9割以上の被爆者が「核なき世界」の実現を切望しながら、同時に、4割以上が、「核の傘」にある日本政府の立場を「やむを得ない」と回答した（同年8月2日付同紙）。今般の軍事侵攻によって、この葛藤はより深刻になっていることは容易に想像がつく。

「理想」のない社会に未来はあるのか。ユートピア的な社会を語ることは、現実回避であるという意見は少なくないだろう。そうであれば、市民社会の英知の集結であろう核兵器禁止条約は何故、120か国以上の賛成により国連で採択され、発効されたのか。現実的でないとして、「理想」を排除することはたやすい。しかしながら、「理想」のない、「理想」を語らない社会を次世代に残してよいのだろうか。核兵器禁止条約の発効に至る市民社会の運動を鑑みると、こういった市民社会の諸活動、さらにはその成熟がいかに重要であるかを明示している。個々の思いが、市民社会の中で醸成され、成熟して、大きな塊となり、国際平和の実現に寄与する。もはや「平和」の担い手は、国家だけではなく市民、そして市民社会である。8000都市以上が加盟する平和首長会議に大いに期待する所以である。

日本は、先の大戦で300万人以上の犠牲を払い、原子爆弾によって甚大な被害を受け、戦争の痛みをよく知るはずである。さらには、憲法において「国の交戦権は、これを認めない」とうたう。「唯一の戦争被爆国」日本、そして被爆地「ヒロシマ」・「ナガサキ」は、戦争による痛み、原爆被爆による痛み、を世界に向けて提示し続ける責任がある。これまで数多の戦争・紛争に対して、「対岸の火事」として捉える傾向にあったこの日本でもウクライナへの防弾チョッキなどの防衛装備品の供与に加え、防衛費の増額も議論され始めた。あの敗戦を基盤にしたこの国の「平和」はこれからど

こに向かっていくのか。

私たちは、新型コロナウイルス感染拡大というパンデミックを経験し、ロシアのウクライナへの軍事侵攻の様子を連日目の当たりにしている。期待が寄せられていた本年8月のNPT再検討会議でも最終文書案の採択には至らなかった。世界は激動と混沌（こんとん）の中にある。こういった時代であるからこそ、今一度、冷静に「平和」とは何かを問い直し、「理想」を語り、「理想」に向けて努力する社会の構築を目指したい。「核なき世界」と「世界恒久平和」を標榜し、「国際平和文化都市」を目指す広島には、そういった社会の構築の中心的な役割を担ってほしい。そして、それは広島が「ヒロシマ」であり続けるには、必要なことだと思えてならない。

（2022年9月）

本稿は、『広島大学平和センター CPHU NEWSLETTER 2022』のセンター長挨拶、『らしっく』Vol.63青梅雨号2022.7（公益財団法人広島市文化財団）の「らしっくコラム」、及び『大学時報』第407号（日本私立大学連盟）の特集記事（印刷中）に修正加筆したものである。

プロフィール

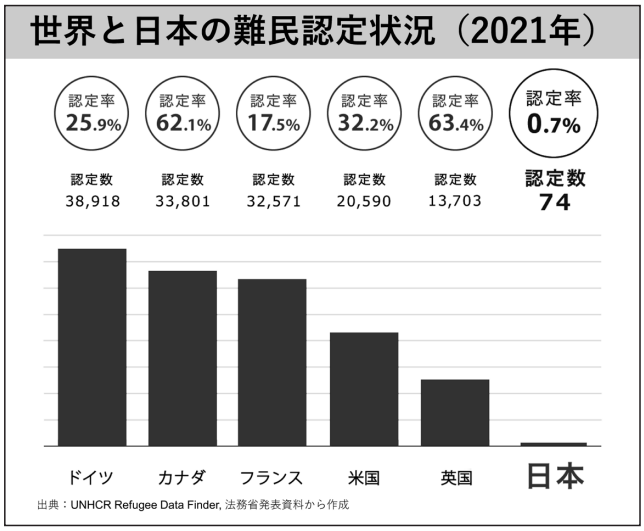
〔かわの　のりゆき〕

広島大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了　博士(医学)。広島大学原爆放射線医科学研究所助手・助教、同大平和科学研究センター准教授を経て、2013年6月から同教授。2017年4月より同センター長併任。専門は原爆・被ばく研究、平和学。

難民と日本
―支援団体の立場から―

認定NPO法人 難民支援協会
代表理事　石川　えり

「シリアに暮らしていたが、自宅と勤務先が爆撃された」「軍事政権に対抗し、民主化運動を支援する学者だったが自身も逮捕されそうになった」「少数民族で宗教も多数派と異なる政府から国籍を与えられず、強制労働に従事させられた」など様々な理由から日本へ逃れ、保護を求める難民がいる。昨年、日本で難民申請をした人数は約2千人、うち難民として認定されたのは74人だった。ドイツでは4万人、アメリカでは2万人が認定される中、この数はあまりに少ないと考えている。原因の一つに、難民認定の実務を出入国在留管理庁（以下、入管）が担っているため、難民を「保護する（助ける）」より、「管理する（取り締まる）」という視点が強いことが考えられる。さらにその背景には、政治的意思の不在とそれを支える世論の声の弱さがあるだろう。



認定NPO法人 難民支援協会は1999年に設立され、20年間にわたり東京都内に事務所を構えて日本に逃れた難民への支援、難民とともに生きられる社会をつくるための認知啓発や政策提言といった総合的な活動を行ってきた。関わってきた難民の数は70カ国・7千人に上る。一人ひとりの難民に向き合い、できる限りの支援をしてきたが、すべての人に十分な支援ができているわけではなく、悩みを抱えながら活動を行っている。

難民は入管で難民申請を行い、その審査に昨年の平均で4年5か月を要していた。その間、多くが東京か、その近郊の県で暮らしている。政府からの支援金を受給するのは350人程度であり、それ以外のほとんどの難民申請者は自立して働きながら結果を待っている。しかし、多くの難民は日本で認定されず、迫害のおそれがあるため帰国もかなわず、再度の難民申請をした場合には在留資格が更新されず非正規滞在となり、仮放免の状態で就労許可もなく、公的支援が非常に限定的になるなど、より困難な状況に置かれている。

そのような脆弱（ぜいじゃく）な状況がコロナ禍によりさらに影響を受けている。ここでは、仮放免など在留資格がない場合について説明したい。前述通り、就労もできず、国民健康保険にも加入できず、公的な生活支援もほぼ利用できないために、周囲の友人たちから数千円ずつお金を借りたり、海外の友人から送金してもらうなどして、これまで何とか生活していたという人が少なくないが、感染拡大の影響で支えてくれていた人の生活も時短や失業等で厳しくなり、一切の収入が途絶えてしまうなどの影響が出ている。「もう食糧が尽きてしまい、お米がわずかにあるだけ」「昨日から何も食べていない」「失業して家も失ってしまった」といった切実な相談も寄せられている。迫害をおそれて帰国もできない中、住民登録がされていない仮放免の成人の難民申請者は特別定額給付金の支給から漏れており、さらに困窮を深めている。

このような状況で、ロシアによるウクライナ侵攻を受けて、ウクライナ難民の日本への受入れが岸田文雄（きしだ ふみお）

首相より発表された。迅速であり、また政府のトップである岸田首相によって発表されたことが異例だったと受け止めている。武力でもって他国に侵略するという行為に対して強い意思表示、そして連帯を示す必要があったのではないか。首相の迅速な受入れ表明が自治体や民間などからの前向きな反応を引き出しており、多くの関係者が受入れに積極的な姿勢を見せた。すでに日本へ逃れたウクライナ難民の人数も9月25日現在で1900人を超えている。

従来難民支援をしてきた立場からすると、入国直後からの本人の状況に寄り添った個別の支援（ケースワーク）が必要となると考える。例えば、ウクライナからの避難民について、前提として理解しなければならないのは、自らが国を逃れて日本に来ることを想像すらしていなかったということだ。逃れてくる間には家族との別れなど様々な過酷な経験をし、日本に来てもすぐには帰国する選択肢はない。入国直後からの支援が重要になる。そして、報道をみても子連れや高齢者など、特有のニーズがある方も多い。特に、孤立させないための支援や、出身国や避難の経験がメンタルに与える影響に対応できているかという観点が重要となる。

また、言葉も習慣も異なる中で生活を一から立ち上げるためには、生活上の困難によりそい本人のおかれている立場によりそって課題を解決するためのサポートが欠かせない。ウクライナの内戦がたとえすぐに終わったとしても、安心して戻れるようになるにはさらに時間がかかるそのため、少なくとも受入れる側は長い視点に立った受入れの準備をすることが必要だと考える。

そして、今回のような社会での受入れの広がりを日本における難民受入れの基盤を整える機会ととらえ、難民認定制度の改善や、庇護（ひご）を希望する全ての人を包括した支援制度の確立につなげる必要がある。避難を余儀なくされた人たちを出身国や置かれている状況によって分断していくのではなく、包括的で公平な難民保護制度を考えるきっかけとしていきたい。

（2022年9月）

プロフィール

〔いしかわ　えり〕

上智大学卒。1994年のルワンダにおける内戦を機に難民問題への関心を深め、難民支援協会(JAR) 立ち上げに参加。2008年1月より事務局長、2014年12月に代表理事就任。上智大学、一橋大学国際・公共政策大学院非常勤講師。

“ご支援ありがとうございます”

広島平和文化センターの活動を支えていただいている維持会員のみなさま
（敬称略。令和4年10月17日現在）

【個人】

飯田國彦、池田寿子、石河内寛麿、黒石正樹、冨田貴子、永田哲也、野嶋俊男、藤井哲伸、山川義亮、渡辺英樹

【団体】

アート印刷㈱、アズビル㈱ビルシステムカンパニー中四国支店、ＡＮＡクラウンプラザホテル広島、㈱アンデルセン・パン生活文化研究所、㈱イシゴウチコーポレーション、㈱イズミ、医療法人清泉会一ノ瀬病院、㈲伊藤久芳堂、㈱エディオン、エリザベト音楽大学、㈱オオケン、大之木建設㈱、㈱大本組広島支店、㈱桐原容器工業所、㈱小泉本店、金光教広島平和集会実行委員会、㈱ザイエンス、サンケイ㈱、㈱サンケン・エンジニアリング、サンデーカメラ、宗教法人カトリック聖パウロ修道会サンパウロ、山陽女子短期大学、㈱シグナル、清水建設㈱広島支店、ジャトー㈱中国営業所、㈱新日本出版社、㈱スガノホールディングス、瀬戸内シーライン㈱、ゼネラルスチール㈱、創価学会広島池田平和記念会館、大成建設㈱中国支店、㈱中国新聞社、㈱中国四国博報堂、㈱中国放送、㈱汐文社、寺岡オートドア㈱広島営業所、㈱テレビ新広島、㈱童心社、長沼商事㈱、日本通運㈱広島支店、日本電気㈱中国支社、日本放送協会広島拠点放送局、㈻比治山学園、㈱広島銀行、広島経済大学（㈻石田学園）、広島県教育用品㈱、（一社）広島県歯科医師会、（公財）広島原爆障害対策協議会、広島県平和運動センター、広島交通㈱、㈻広島国際学院大学、（一財）広島国際文化財団、広島市信用組合、広島修道大学、㈻広島女学院、広島信用金庫、広島赤十字・原爆病院、広島テレビ放送㈱、広島バス㈱、㈱広島バスセンター、広島文化学園大学・短期大学、広島平和教育研究所、㈱広島ホームテレビ、広島友愛同盟、（公財）広島ＹＭＣＡ、広印広島青果㈱、㈱福屋、マツダ㈱、三島食品㈱、㈱みづま工房、㈱もみじ銀行、安田女子大学、㈱山口銀行広島支店、㈱ユニバーサルポスト、㈱リーガロイヤルホテル広島、立正佼成会広島教会、菱信工業㈱

※ 会員は随時募集しております。当センターホームページをご覧いただき、お気軽にお問い合わせください。